かささぎ 通信 第31号

2015年2月13日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年一月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和8年6月号初出の二作品を読みました。「菊の花」、「あのころ」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）

「あのころ」（筆名　北村よしの）について報告します。

あらすじ

主人公みち子は、町でも指折りの造り酒屋の子です。目じりがちょっと上がっているので、「おコンちゃん」というあだながつけられていましたが、平気でした。みち子が小学校五年生の時の、転校生大野さんへの、憧れと裏切られた思いが、この話のテーマになっています。

東京から来た大野さんは、言葉もはきはきしてきれいで、身なりやからだのこなしも垢抜けしている、かわいらしい女の子でした。みんなから注目される存在でしたし、みち子も大野さんが好きでした。でも、組の中心になっている、町長さんの子の門田さんと、お医者さんの子の明石さんとが、すぐに仲間に入れてしまいました。

ある時、大野さんの前で、門田さんたちからみち子は「おコンちゃん」と呼ばれ、恥ずかしく、泣きたい気持ちになります。家に帰るとみち子は弟にやつあたりし、椿の木の下に立ちすくみました。

その後、友達のくせやしぐさを真似て、誰だか当てる遊技の時に、大野さんが両手の人差し指を目尻にあてて、ちょっと釣り上げて見せました。すぐに「みっちゃんよ、みっちゃんよ。」と当てられ、みち子はたまらない気持になります。

それっきり、みち子は大野さんのことが嫌いになりました。

みち子が六年生の時、みち子の家は破産して、裏町に引っ越します。小学校だけでやめて、裁縫の稽古に通うみち子は女学校へ通う大野さんたちとは、顔を合わせても黙ってお辞儀をするだけでした。

この童話「あのころ」について、会員の水野日出夫さんから示唆に富んだ指摘が二つありました。

一つ目は、やるせない気持ちでみち子が椿の木の下に立ちすくんでいると、一匹の蟻が幹をはい下りてくる場面のことです。

「みち子は、その蟻を、人さし指の爪で、ぎゅっとつぶして殺しました。蟻は、ポトリと下へおちました。」

これと状況がよく似た文章が新美南吉にあると紹介されました。

南吉の「――何をこくだ、」という断簡の中の言葉です。貧しいのに自分を学校へやっていることで、両親がけんかをしているのを聞いて、

「僕は机の上をはってゐる萌黄色の昆虫を爪の先でぷつんと潰す。」

新美南吉と森三郎両方の作品を読みこまれている水野さんならではの指摘でした。

新美南吉の断簡は「校定　新美南吉全集　第七巻」中の「解題」には、この文章は使用原稿用紙の種類からみて、一九三四年一一月から一九三五年八月までの間に執筆されたものと推定されると書かれています。森三郎の「あのころ」は一九三三年に掲載されています。このころ、両者が共通で目にする作品の中にこのような文章があったのか、森三郎の作品を南吉が目にしていたのか、同年代の作家の感情表現として、類似の表現になったのかはわかりませんが、興味深い話です。

もう一つは、水野さんの感想として、「あのころ」が、吉屋信子の『花物語』の中の特に「41竜胆（りんどう）の花」によく似ているというものでした。憧れの大野さんから、皆の前であだ名の形態模写をされて、裏切られたという気持ちになる構図のことです。「北村よしの」という女性名義の作品ですから、そういうこともあったかと、会は盛り上がりました。

○　次回予定　3月13日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和8年8月号初出作品

「フィルム」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）「針」「ひとりっ子」